

火曜会通信

発行日：平成13年10月1日

発行：伊丹市文化財ボランティアの会

発行所：伊丹市千僧1丁目1番地

伊丹市教育委員会事務局内

<巻頭言>

『私のふるさとと伊丹の文化財』

片山 美代子

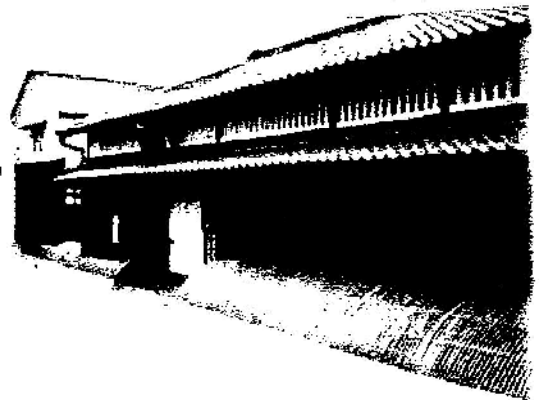
7月の会報に「私のふるさと」をのせて頂き、伏見も酒どころだったなあという所で終わっていますので、お酒の銘柄を挙げてみたいと思います。「月桂冠」「キンシ正宗」「黄桜」「松竹梅」「招徳」、何しろ私自身が飲めないものですから、これくらいしか思い出せません。伏見には40社位あるそうです。この写真は、酒の博物館「月桂冠大倉記念館」で伊丹の岡田家に雰囲気似ていると思います。前の竹垣は、「いぬのはしり」と申します。これは京都の古い町家でよく見かけられます。そして少し行った所に中書島という京阪の駅があり、そこには案外大きな遊廓があり、そこを通るとおばさんが椅子に座ってお客さんと呼び止めておられたのを覚えています。その中書島で宇治線に乗り換え宇治に通勤した事もあり、沿線には六地藏、黄檗山、三室戸、宇治とよく通ったものです。宇治橋を渡り平等院、塔の島、宇治神社と行っていましたが、今のように文化財に興味も無く淡々と通り過ぎるばかりでした。

また、奈良電に乗り竹田で降りると城南宮さんがありよく参りました。次の駅が烏羽街道という駅で今でいえば西国街道、有馬街道といった街道があったのかも知れません。そして十條、東寺とあり、21日の日には東寺さんにこれもよくお参りしました。ここが西国街道の出発点とは知る由もありませんでした。京都も一條通りから十條通りまでありました。今思えば平々凡々とした娘時代でした。

伊丹には墨染寺と言う名をつけられたお寺が第一ホテルの横にあります。深草の地に墨染(スミゾメ)駅と言う京阪の駅があります。

多分、秀吉の家臣の久左衛門が領主としており、その領内に墨染薬師があり久左衛門の一人娘が伊丹の学者に嫁いできた時に、護身仏として尊像を持参し、この小庵におまつりした事からこの名がつけられたそうです。

私も今考えればいろいろな文化財に出会っていたのですが知る由もなく悔やまれます。それにしても伊丹は寺が多いのには驚きです。



主な行事予定(11月から1月)

◇ 定例会

☆ 分科会日程は4ページです

11月13日(火)	秋期研修旅行「丹波篠山」	市役所前集合 8:20
12月11日(火)	研究発表「未定」	中央公民館
1月15日(火)	研究発表「未定」	中央公民館

丹波杜氏が今日なおも義民として崇め、恩人として崇拝する歴史上の人物がいる。篠山城趾と京都の松尾大社に碑が建つ、市原清兵衛がその人である。義民伝市原清兵衛によると「強権に基づく圧制に対して、強い反発心と事を貫く鉄のような強い意志の持ち主であった。」

丹波の冬は寒い。信州飛騨の高山盆地に似ているという。福知山線を北にたどると、篠山口の二つ手前に古市という駅がある。松尾山のふもとだ。駅の標高は211m。山の尾根が東西に延びている。南が摂津で北が丹波の国。その稜線が、摂津と丹波の冬景色を描き分ける。そのような丹波の自然の厳しさが出稼ぎを必要とした。

しかし当時の篠山藩は出稼ぎを厳しく制限していたから清兵衛は死活をかけて、野宿を重ねながら江戸に出向き、領主青山忠裕に出稼ぎ制限令の撤廃を直訴した。その時代、酒造の出稼ぎを篠山藩では「百日稼ぎ」と称した。出稼ぎを野放しにすれば労働力が流出して領内での農業経営が成立たない、ひいては藩財政を乏しくする。というのが百日稼ぎ制限令の理由であった。

直訴から1年半、1802年(享和二年)4月篠山藩は制限令を大幅に緩和した。秋の彼岸から春の3月までの100日間、希望するものは出稼ぎの道を開き、そのうえ杜氏と脇杜氏には夏作業の30日間も認めた。ここに清兵衛は義民となり恩人となった。もとより直訴はご法度、即刻打首であるところ命を落とすこと無く入牢中も厚遇されたという。

領主忠裕が清兵衛の直訴で出稼ぎの認識を新たにさせたせいなのか、晩年の清兵衛は息子と共に伊丹の酒造家に身を寄せ、父子ともども伊丹の地に骨を埋めたという。義民清兵衛と名君忠裕のおかげで、その後の丹波杜氏の存在がある。

丹波杜氏組合は毎年9月の第3日曜日、新酒の仕込みに備えて杜氏の結団式を行なう。まずは京都の松尾大社から神官を招き、「酒造安全祈願祭」。日本第一酒造神の守護と祝福を授かる。ついでに、杜氏達は揃って篠山城趾の清兵衛の碑に詣で報恩を誓うという。

そして10月13日伊丹は猪名野神社の秋祭り。この日伊丹の酒造家たちは丹波からの杜氏を招いてもてなす。白雪の杜氏・寺本文平さんいわく、それに招待されんおやっさんは、「お前は今年はクビや、休んでくれ」ということですわ・・・おやっさんは杜氏のこと、蔵人用語。前年仕込みに失敗したおやっさんは、蔵元から秋の祭礼に不招待という無言の休職宣言をされた。招かれた者は丹波で取れた松茸を手土産に伊丹へ上がり、そして帰る時は蔵元から酒と酒粕を手土産にもらう。

晩秋の11月、伊丹の町へ丹波から蔵人たちがやってくる。伊丹酒造組合史によると、酒の仕込みにホーロータンクを使うようになったのは昭和初期、それ以前は酒造りに必要な容器は全て杉でつくった桶であった。20石[3600ℓ]口径1.6m、高さ2.0m

蔵人の職階：総括責任者 杜氏、補佐する頭、麴を仕込むに責任を持つ大師、もと仕込みの責任を担う上もと廻り、中もと廻り、下もと廻り、蒸し米を担う釜屋、道具整備責任者内道具廻し、外道具廻しとその下に雑役係として上人(じょうにん)、中人、下人そして飯炊きがいた。すなわち、1回に酒の原料米を15石仕込む蔵の標準的人数18人構成。



参考文献：日本の名酒/稲垣真美、酒は誰白/加藤百一、伊丹郷町物語/真鍋禎男、万有百科事典

□ 主な活動の記録 □

＜伊丹郷町館ガイド＞

7月3～6日	来場者	市立笹原中学一年生	4クラス約160人
	火曜会参加者	坂根・豊田・西口・難波・大沢・稲美	
7月4日	来場者	東京都町田市議会	20人
	火曜会参加者	坂根・豊田	
9月16日	来場者	吹田市「景観を良くする会」	36人
	火曜会参加者	豊田・西口・山口・片山	

☆ 上記日程以外にもガイド活動を数名の方で実施しています。

＜出前活動・児童くらぶ訪問＞

7月30日	訪問先	天神川児童くらぶ	48人
	内容	手作りおもちゃー牛乳パックの船・割箸のゴム鉄砲	
	火曜会参加者	山本(紀)・日野・治井・豊田・山中・辰野・山本(喜)	
8月3日	訪問先	池尻児童くらぶ	28人
	内容	外国の人形・おもちゃの紹介・動物なぜなぜ問答・ハーモニカ演奏	
	火曜会参加者	山内・池田・治井	

＜学校外活動・『みやのまえ文化の郷』講座＞

8月22～23日	会場	伊丹郷町館	参加者	9人
	内容	館内案内と説明・ちぎり絵づくり・かるたづくり・ハーモニカ演奏など		
	火曜会参加者	山内・稲美・藤本・山本(紀)・福岡・杉本・辰野・難波・山中・鍛冶 ・酒井・平松・池田(利)・治井・塩井・西口		

☆ お断り 今回より火曜会参加者の敬称を省略いたします。また、記載順不同となっておりますのでご了承ください。

＜学校外活動＞ 『みやのまえ文化の郷』講座を終えて 山内 高美子

「伊丹郷町館で学ぶ夏休み」をテーマに、小学生とその保護者及び会員が参加して旧岡田家住宅・旧石橋家住宅・新町屋・美術館講座室を会場にして「みやのまえ文化の郷」講座を開催しました。

講座内容は、「昔の伊丹」のビデオを見たり、伊丹郷町館を見学したり、「朝顔」や「ひなげし」のちぎり絵を和紙を使って制作したり、伊丹市文化財愛護カルタの中身を学習し、カルタの絵づくりとカルタ取りのゲームをしたり、動物なぜなぜ問答を楽しんだり、ハーモニカ演奏によるミニコンサートを聴いたりしました。メニューが豊富で充実していたととても喜ばれました。

参加の小学生とのお母さんたちの声を少し紹介します。

- ・両日楽しく興味を持って取組め、夏休み中のよい体験として思い出深いものとなった。
- ・ガイドを丁寧にしてもらったので、通り一遍の見学とは異なり、伊丹郷町館の内容がよく理解できた。
- ・ちぎり絵やカルタの絵づくりは、1人1人への指導が行届き、ラッキーだった。
- ・心のなごむミニコンサートや、面白い「なぜなぜ問答」等もとてもよかった。

以上の声からもわかるように、受講した方たちが満足されてこの講座を終えることができた事が最高の成果だと思います。



出前活動 天神川児童クラブの様子 739

□ お知らせコーナー □

<分科会開催日程>

◇ 第2部会 (街道を歩く)

10月23日(火) 集合時間 JR伊丹駅改札口 9.20

JR高槻駅→芥川宿一里塚→今城塚古墳→ハニワ工場公園→太田茶白山古墳

11月27日(火) 集合時間 市バス「下河原」停留所 9.40

浄源寺→松尾芭蕉の碑→辻の碑→教善寺→和泉式部の墓

◇ 第3部会

いずれの日も集合時間は13.30です。古文書解説の手ほどきから学びます。

10月30日(火)

12月4日(火)

1月9日(火)

スワンホール

スワンホール

スワンホール

◇ 第1部会 (村の歴史)

いずれの日も集合時間は9.30です。当面研究テーマに対するグループ内情報交換をします。

10月16日(火)

11月20日(火)

12月18日(火)

中央公民館

中央公民館

中央公民館

<リレー随想>

『風呂敷考』

治井 勇夫

梅田から京都への車中、思わず目をみはった。向い座席の着物姿の御婦人と、膝におかれた風呂敷包み、そして軽く添えられた指先との見事な調和である。今どき珍しい光景で、しばらく眺めていたが非礼を悟り、あらためて『風呂敷』についてひとり思いをめぐらせた。

かつては、どこの家庭でも見られたが今はテレビなどの映像で見えるぐらいである。袋物カバンなどの出現、贈答品の宅配に押される一方で、生活習慣の変化に伴う社会構造の変遷も見逃すことはできない。

平包と呼ばれていた布が『風呂』と結びつくのは、室町時代以降で「足利義満が湯殿を建てた際、招かれた大名たちが衣服を取り違えないよう家紋入りの平包に包み、風呂から上がると足元に布を敷き身づくりをしたことから、風呂の敷物として『風呂敷』と称するようになった」と言われている。

その敷物が「包む」ものとして一般化するのには元禄年間になって銭湯ができ、男は風呂ふんどし、女は湯文字で入る習慣から、入浴後の濡れ物を包むのに使われたころからである。また、このころから商人が商品を持ち運ぶ風呂敷も生まれ、小さなものを包む「袱紗」もできた。一説によれば「包む」は母親のおなかの中に子供が入る状態を示しており、包むということは、ものを慈しむ心が宿っているとされている。

こうしてみると風呂敷は「包む文化」であり、カバン、袋物等は「入れる文化」で両者の違いは、「慈しむ文化」と「利便と合理性」のように思えてならない。ガイド等で仏像に接するとき、その微笑みにやすらぎを覚えるのは、仏に包み込まれる「己」を感じるからであろうか。しかし、だからといって、合理的で簡便なものをもはや否定することは不可能であろう。これらの恩恵を享受しながら、風呂敷の持つ「温かく、全てのものを包み込む」やさしさも忘れないよう心掛けていきたいものである。

今回は、山本 紀子さんをお願いします。